



～シーズン1「SMクラブの受付」～

エピソード 2:みちのり

しすてむ♥きよたけ

前回、予告として、面接日のことを書く
と添えました。しかし、「面接日」を置いた
ことで、「SMクラブの受付」になるまでの
僕と性風俗の接点が気になり、エピソード
2を「道のり」にしました。何気なく進み、
やり過ぎていたかのように過ごし、そう
見せかけながらもあれこれ考える機会にな
った体験を綴っています。

ラインアップは、「僕と水商売の出会い」、
「水商売域にいる人たちとの出会い」。×は、
「僕と性風俗の出会い」でございます。

1. 僕と水商売の出会い

大学生だった頃の記憶が、僕の頭の中に
蘇る。

水商売をしている友人が数人いた（ガー
ルズバーやキャバクラ、クラブ、ラウンジ
などと色々なジャンルがあるがゆえに、一
括りに「水商売」と言うのはいかななもの
かと思うが）。給与は、学費や生活費の一部
にしていたようだった。働くきっかけや働
く理由でもあったのだと思う。また、彼女
たちのような理由で「水商売」以外のアル
バイトをしている人もいた。

どうして「水商売」を選んだのか、と関
心が引き寄せられる人もいるが、僕は、始
めた理由にあまり興味が湧かなかった。そ
こで働いている理由だなんて、「水商売」以
外のアルバイトをしている人へは、そうそ
う興味をもって尋ねることはない。あると
いえば、面接の時くらいだろう。そうだか
らか、「水商売」となると、生まれる質問を
不思議に思っていた。

でも、全くそうだったと言い切れるかと
自分に尋ねてみると…「水商売」がその他
の「アルバイト」と全く違うものだと思っ
ていたわけでもないし、ときには違うもの
として認識していたから、区分していなか
ったわけでもしていたわけでもなかった。
僕の「水商売」に対する関心はそれら両義
性を内包させていたのだろう。

そうした関心は、断定し難いが、僕自身
が「夜の仕事、向いてると思うよ」と言わ
れた（る）こともあり、それがなぜだか知
りたい好奇心になっていたのだと思う。そ
して、すでに体験していたアルバイト経験
から、楽しみやそこから生まれる存在価値
は働きはじめてから変わっていき、それも

また人それぞれ様ではないと思っていた。

振り返ればその場にいる理由なんて、始めた頃と変わることだって、そして、後から気づく何かもあるのだから、口を揃えて言うような入店動機よりも、実際の体験が気になっていたってことだろう。



しかし、「『夜の店』に行ったの？」と聞かれれば、NO だった。当時大学生だった僕は、「夜の店」をバイト先の選択肢の1つになっていたってよかったと思う。居酒屋で明け方まで働いていたり、ある時は、朝から夜まで営業マンになっていた。十分な仕送りをもらいながら、貯金をし、一括でバイク購入を試みたり、目的ももたずに知人の知人がルーマニアにいるというだけで、1ヶ月滞在（滞在記を書くなら、夜道さまよい路上で放尿くらいの経験）してみたりしていた。もっと怠惰なことをあげれば、当時付き合っていた彼女の家でゴロゴロして過ごす、クズみたいで独りよがりだったかもしれないハッピーライフ。

お節介ライフもしていた。部屋が空いてるというだけで、彼氏といざこざあった女の子に数日部屋を貸してみたり、別れてくれない彼氏に付きまとわれている女の子からご飯食べた？ってことで、つつい行ってみたら最終的に窓を割って入ってくる血

まみれ男に遭遇し、ビビりながらもカップルお別れの瞬間に付き合い、ほっておけばいいのに血まみれ男にすぐに病院に行くよう勧めてみたり、その後、身内同士の喧嘩でしょーと法で定められていないことには関与できない（この時期恋愛間におけるDVやストーカー行為に規制がなかったはず）とかほざく警察さんに来るのが遅いだけの現場の声を聞けだのボロカスいってみたら、故郷が近いの云々かんぬんで一人盛り上がる警察を目の当たりにして、警察って何してんだ？とうんざりしてみたり。そもそも、付き合ってる時は、話したいと思えば、時間を合わせるのに別れなくなったら一気にスパッと切るのもどうなん？と思うけど、別れ話ほど面倒だと思ってもないなーと思いながら、人の恋愛に首突っ込んでみる余計な人でもあった。

そんなことをしていた当時の僕のキャンパスライフといえば、学校に行ったとしても、教室に入らず、キャンパス内でタバコを吸いながらぼけーとしていたのだった（授業も出てました！たまに）。

ふらふらしていたんだから「夜の店」に遊びに行く時間もお金もあったと思う。自分の「時間」と「お金」の都合で、行く場所を選択することだって大いにある。場所との出会いの始まりと言いかえることもできると思うのだが、「行く理由」も「行かない理由」がなかった。理由がないと始まらないこともあるってことかもしれない。

未だに思う。理由を明確にして場へ入ることって、すごく難しい。目的や目標を明確にして、とか、ビジョンをもってとか、あたかもそれが、成功へ導くかのように言

う人もいるが、僕は欲しいものだけを手にいれることが富や名誉や幸となるなんて信じていないし、それが成功とも思わない。欲しいもの以外が見えなくなる貧しさも、そこにはあると思うから。でも、知りたいことだって、欲しいものだって、手に入れたくなるときだってあるし、いらぬものはとことんいらぬと思うことだってある。

明確な理由はなくとも、たまたま選んだ場所で、それなりにやっていくということは、人や社会の流れに合わせて出会い、進んでいくこと。これは誰もが持つ賜物であるような気がする。

「夜の店」に辿りつくのにそんな大きなこと掲げなくても行けるのに、当時大学生だった僕らにとって「夜の店」は、理由がないと行き着くことがなく、理由を作ることができるから行き着く場所だったのかもしれない。なんのために行くのか、不透明だったのだろう。だから、「夜のお姉さん」は、何かテクニシャンだと思う。何かの流れに合わせて辿りつき、理由もそれとなく持つことができるわけで。さらに、指名を取り始めるのだから、巡り合わせでたどり着いた男たちを次は、個人に会いに行くようにすることができる人たちなのだ（もちろん、男にも事情があって魅了されるのだろうけど。）

学内で会う彼女たちは、勉強や仕事で慌ただしくしていたと思うが、充実したように見えていた。教室に行きたくないから行かない選択をしている僕の興味は、彼女たちの夜と昼両方の生活にあったのだろう。そして、僕の知らない世界、そこで働く楽しみやそこで何が起きているのかというこ

とにそそられるテクニックにやられていたといってもいいかもしれない。

それで、彼女たちに興味があることを伝えたの？…当時、僕が完全に惚れ込んでいた人は「夜のお姉さん」もしていたから、聞く環境はあった。しかし、NOだった。

「色恋」を聞くことになるかも？それって、複雑な気持ちになりそうだし、聞いても聞かなくても、彼女は彼女なわけだし、僕が彼女を好きなことには変わりはない。

全てが「色恋」だったかなんて確信はないが、まー知る時が来てからでいいかーと流していた事実は残っている（イメージを作る場が、知らなくても勝手な想像や妄想でやきもきする気持ちを浮上させていたのだろう）。

かといって、何も知らないわけでもなかった。彼女の充実している姿から、もしかしたら「色恋」や「お金」だけで過ごす場ではないのかもしれないと感じていたのだから。それらだけの場合もあったかもしれないが。

余談

「夜のお姉さん」なのに金を払わず、一緒に過ごしていた時間があったと思うと不思議なものだ。「夜のお姉さん」である彼女が好きだったら、せこい男だと思うがそうではなかった。

でも、「夜のお姉さん」であることで、男に嫉妬が生まれる。どんだけ小さな男だと思うが、夜のお姉さんをしている貴女を丸ごと愛しているだなんて、若干の上から目線になることすらできなかった。結局、「目の前にいる彼女」が好きだったという話で…

「なんで俺/私のこと好きなの？」とかいう理由も楽しいのは始めのうちで、後にはそんなささや

き鬱陶しくなるものだし、案外「そこ!？」なんて思って「聞かなきゃよかったんじゃない!？」なんて時期だって迎えることだってあるだろう。好きなものは好き。それ以上、それ以外に理由はないものだ。でも、この理由が相手にとってドンピシャだと、恋に落ちるといふ現実もあるだろう。外見、内面、地位、名誉、富も恋愛対象に含まれるだろうが、儚くもそれは対象からそれていくことだったあるのだろう。上記の中でも、地位、名誉、富が変わっていないとしても、外見や内面のキモさが気になり始め、愛せない事態だって訪れることもあるだろう。そんなキモさはもともとありましたっていう場合も、時が経てば眼について止まらないなんてことも当たり前起こる。

そんなこと、始めからわかっているのに、人はそれでも恋を成就させ、やめとけばいいのに、本当の愛なんてわけのわからないものを探し始める(人もいる)。



2. 「水商売」域にいる人同士の出会い

教室に入らず、キャンパス内で過ごしていた僕は、あの場をいろいろなファッション雑誌の集結だと思っていた。カジュアル系、エスニック系、ヒップホップ系、ゴスロリ系、お姉系(最近オネエ系ってあるけど、これは同じ表現だとしても、ファッションジャンルじゃない、はず。切り離せない気もするけど)、ギャル系、お兄系。一冊

の雑誌を買わなくても、あそこに行けばいろいろあるぞ!と思い、キャンパス内でぼーっとしていたのだった。(大学を何だと思っていたのだと不思議なものだ。授業をサボると楽しいよ!とサボりを進めているのではない。だが、サボるなら器用に堂々と休み、十分に楽しむことは、おすすめする。一応、添えておくが、あの頃授業に出ていた友人たちの人生は、今でもユニークだし充実している。教えられることは、未だに多々ある。)

あの場所に「あ、水商売の人っぽい」とか思うことが、ちらほらあった。「お姉系」「ギャル系」「お兄系」ファッション誌に、「夜のお姉さん」や「お兄さん」が「読モ(読者モデル)」として載っていたり、彼らの髪型が流行になっていたこともあった。

夜のお兄さんやお姉さんが、なんだか、お昼のキャンパスに出てきてるなーと思う光景だった(実際「水商売」をしている人とは限らなし、むしろ違うことの方が多いと思う)。「夜の」お店がある場はある程度決まった場所にあるから、僕は学内で不思議な感覚を持っていた。しかし、お昼に出没ともなれば、昔と比べてこの業界を受け入れている人たちが増えてきているってことかーと思ったし、僕と「水商売」は、決して懸け離れた仕事ではないなーと思っていた。

余談

「人は外見より中身」なんてこと言いますが、いやいや、そんなことガチで言ってます?と思っただ体験をここで。

僕は、上記であげたファッションに魅力を感じず、可愛いともかっこいいとも思っていませんで

した。でも、最近、「ラウンジ」に行ってみたのですが、「アリ！」と思いました。高級そうなソファーとか、ピカピカしたグラスがある場に、ちょっと清楚な女性たち。また、ある人は、カチッとキメた髪型をしている女性。そこには確かに「夜のお姉さん」がいる！と感じた。ええ。ええ。それはそれは、魅力的だと思いましたよ！だって、不自然じゃなかったんだもん。なるほど…人を魅了するのは、外見だけでもない！外観も含めて外見判断してるわ…と思ったのでした。

ちなみに、「夜のお姉さん」はお昼間でも、同じ服を着る人もいます。TPOに合わせた着こなしをするようです。夜は、スカーフを巻いてみたり、お昼とは違うアクセサリーをつけてみたり（だから、お昼キャンパス内でみかける、それらしき人が、「必ず夜のお姉さん」だとは限らないと思うわけ）。

お昼の姿との違いを、最も感じさせるのは、髪型だと思いました。彼女たちは、美容室でセットをしてからご出勤のようです（僕が知る方々は）。この話を、「夜のお姉さん」にしてみると「自分でしない」ではなく「自分でしたらいけないの！」とピシッと言われ、見栄え作りにルールと拘りがあるようでした。でも、しなくてもいいから、とにかく来てと声がかかる場合は、そのままご出勤のようです。男はその些細な準備姿を知らないが、男がいなければ、こんな準備もしないのではないだろうかと思いました。男もまた、そういう場に行くから、身なりを気にする。

遊びに行った日の僕は、短パンに寄れたTシャツで、そのまま行こうかと思ったのですが、ジーパンによれよれしていないTシャツに着替えて行きました。帰宅後、僕もちょっと見習ってもいいのか？と思いタンスに入った縫れたTシャツを取り出し、捨てるか否か悩んだ。結局、気に入って

いるから捨てず、これからも着ることにしました。

3. 僕と性風俗の出会い

(1) そこそこの高級車内にて

「みさえ、彼氏が借金あるから風俗で働き始めたらしいよ」とそこそこの高級車内で、そらが話す。「へー。その彼氏って…」
「彼氏はAVに出ることにしたらしい」「…え?!」。

AV男優をして借金返せるの?そんな状況の中で、気持ちよくなってどうするん!?違う仕事だってあるって話だろうが!と借金返済の苦勞と性的快感をひっかけ、みさえのセックスワークを援護するような発言をしていた(AV男優も、普段の性行為と違うからけっこう大変であるにもかかわらず)。同時に、いろいろな男と性的関係を持つ彼女と、いろいろな女と性的関係を持つ彼氏だったら、それはバランスがとれてるって解釈もありか!?と思った。とはいえ、「えーっと、病気とかって大丈夫かね?」とみさえの体を心配していた。

(2) 欲望誘惑をするハコ

下世話な話と思う人もいるかもしれない。「最近アソコが痒い」と発する女、「軟膏や!っていうか、医者に行きなよ」と返す僕。性風俗で働いている人に限らず、性病になることだってあることは承知だ。

僕のみさえに対する心配は、「性風俗」=「不特定多数の人と性的接触がある」=「性病感染リスク」こういう思考をしていたのかもしれない。しかし、この思考は、何か見落としていないだろうかと思っていた。

確か、みさえは「ヘルス」で働いていたと思う。「ヘルス」でお遊びをする場合、短時間（だいたい30分以下かな？）コース以外は、ゴム（コンドーム）無しのような。言うまでもないが、性病予防のために用いるゴムであるため（一般的にはゴム＝避妊という認識が高い。「ヘルス」はそもそも本番行為を禁止しているため、避妊のためという用い方は、前提に置かれていないということになる。）、ゴム有りのお遊びと比べれば、ゴム無しの性的行為の性病感染リスクは上がる。しかし、「ヘルス」でゴム有りのお遊びコースもある。それは、短時間（30分くらいだと思われる）コースの場合だ。短時間コースの方が、リスクは低くなるのかもしれない。

しかし、短時間コース＝安全だという話ではない。一人の相手と性的行為をもつ時間が、短時間＝不衛生になる場合もある。時間があれば、シャワーでイチャイチャも楽しみつつ、イチャイチャと見せかけてキャストが念入りに洗う時間を短縮させなくなる男もいるだろうから。

建前は、飲食店である「ピンサロ」を例としてあげると顕著かもしれない。そもそも、そこには、シャワーが無い。性風俗関連特殊営業に位置づけられない業種であるため、おしぼりが使われるようだ。だって、飲食店という位置付けだから。

飲食店では、当然のように席についたら、おしぼり（チェーン店ではおしぼりより、ウェットティッシュが出てくる率高いかな？）がでてくる。「ピンサロ」も当然、飲食店の接客としておしぼりを。でも、普段食事に行ったら、手が触れるモノや口に入

れるモノを拭くことはないけど！？と思うのだが。食品衛生面が、万全であることを前提に置かれているのだからいたし方ない。

それを知っていて利用する人たちもいるわけで、ただただ、リスクがどーのこーので人が場へ辿りつくわけではないと思う。

（あまりないと思うけど）飲食店だから入りやすいのかもしれないし、手っ取り早く抜けるから気楽、一人の人と長時間過ごすよりは会話をする時間も短く精神する減らすこともあまりないからいい、とか色々あるだろう。

「性の商品化」を大肯定も大否定もしない僕であるが、商品化されないが故におきる個人の判断や責任はついてくると憶測させられ、肯定したい思いも出てくる（「受付」をしていた時、あえて「商品」として、扱ってきたこととそうではなかったかかわりがあったので、個人的には「性の商品化」以外の言葉はないものか、と思っている。あと、何が商品なのかわかんなくなる経験もあった）。飲食店として管理していないモノだって、場にいるキャストと客は触れ合う。それは、接客といった人と人の関わりだろう。

しかし、ヒトとのかかわりそのものがサービスであり、ここは管理しようがない。一方、衛生管理していたとしても相手がそうでなければ、その管理は無念に終わることだってあるだろう。だって、人はそれぞれ異なる経験をもって他者と出会うのだから。そこから、賛否両論ありながら、あるから、調整しながらかかわりあっていく。それぞれの場の位置付けが違うのだから、そこには違うかかわりがある。そして、そ

ここで生まれる楽しみも人によって異なるの
だろう。

客も表向き飲食店としての接客をされる
ことをわかって、もしくは、短時間のコー
スでゴム有りだとわかって、お遊びをする
場を選んでいるのだろう。性病うんぬんで
人は場を選んでいないことだってあるのだ
ろう。気楽さや手軽さを求め辿りついでい
ることが、それだ。相手とうまく過ごせる
ことがいいことのように過剰に取り上げら
れている時代だから、やり過ごせる関係だ
って欲してしまう。もしかすると、人とい
い関係を築くだなんてわけわからない表現
より、風俗や建前飲食の方が、ルールがあ
ってかかわり方が理解しやすく、接しやす
いこともあるのかもしれない。リスクもあ
るかもしれないが、何をするかわかる場と
いう枠に惹きつけられ、中では多様な楽し
みが生まれるのだろう。



(3) 確かに3人いた

そう思うと、もしかしたら、「借金返済」
のためではあったが、みさえにもそこに居
たから知った、生まれた楽しみが、あった
かもしれない。なかったかもしれないが。

でも、あの頃の僕とそらは、そこまで考
えられなかったと思う。僕とそらは、そこ
その高級車内でタバコに火をつけ、みさ

えの事情を煙で紛らわすかのようだった。
また、軽快な洋楽をそこそこの大音量で流
しながら、どうしようもなさで溢れ流れて
しまったかのようにもあった。「それで、最
近自分どうよ？」と互いの近況に辿りつい
ていたのだった。

その後、みさえは、どうしているのだろ
う…そらは、どうしているのだろう…。僕
は、そらと連絡取れる状況であるが、連絡
していないし、もう何年も会っていない。
僕は、転々と拠点を変えて暮らしているし、
同窓会があっても顔を出すことはほとんど
ない。でも、「そら、みさえはどうしている
のだろう」とふとした時に思う。きっと、
そらのことだから、今でもみさえと会って
いるか、連絡を取り合っているか、それな
りに関わりがある気がする。みさえも、そ
らだから「性風俗」で働いていることを話
したのだと思うから。

(4) 魅惑的な彼女たち～「SM」の扉～

とある室内。居心地が悪かった感覚が残
っている。そこに20人くらいいたろう
か。ふらふらしている僕には似つかわしく
なく、拘束ある時間、指定の場所がある処
に出席をした。そこは、時に発言を求めら
れる場だった。基本的に喋りたい時にしゃ
べる人だったから（今もそうだけど）発言
を求められると分かれば、極力避けたく
なる（避けないこともあるけど、それは、自
分が思うようにいかないことだってあるか
ら頑張ってみよう！くらいで、頑張ってい
る）。

そこで、2人の女の子に遭った。綺麗目
の顔立ちにさらりと着こなすデニム姿。ハ

キハキした口調。でも、どこか天然！？と思うような人。もう1人は、ラバーのコルセットを巻いて、奇抜なわりに恥ずかしそうに入って来た小柄な人。彼女たちの名前は、和美と貴子。

はじめは、どちらも気にならず、2人の存在すら意識していなかった。だが、2人が一緒に居たとき「うわ。俺この人たち気になる…」とそそられた。そのときの印象が先に綴った風貌だった。2人の共通点が見つからず、「そもそも、仲がいいのか？」と疑問に思ったこともあり、風貌だけが僕に残した印象ではなかった。特に、貴子は1人で居たら、変わってるやつとか、可愛い女の子、で終わっていたかもしれない。しかし、和美がいるとその2つのインパクトに拍車をかけていた。和美も同じ、1人でいても、美貌と天然のギャップは感じただろうが、貴子がいるとそれらが煌びやかに引き立っていた。

数日後、外をうろちょろしていると和美とばったり会った。「おー！何してんの？」と声をかけそのまま「飯行こうや！」「あ、ここに連絡して」と連絡先を受け取った。ほとんど知らない人同士にしては、軽やかなやりとりだった。軽快さとは裏腹に、実際はあたふたしていた。

ナンパしてしまった感が強かったからだった。軽く言ったものの、願っていたご飯だったのだろう。「あ、貴子も誘って〜2人の日程が会う日に行こうか」と貴子も連れてきてもらうよう頼んだ。デートに誘いたいけど断れるかもしれないし〜対一だったら緊張するし〜的誘い文句で、だせ〜なとか思ったけど、そんなことどうでもよく、

2人とも気になったから、同時にという単純な誘いを決行していた。

彼女たちからすれば、気軽に誘ってきた僕に対する、なんだコイツ！？度は高かっただろう。

そそくさ和美にメールをしていた。すぐに返事があったどうかは忘れたが、3人で飯に行くことになった。

夜遅くの集合だったと思う。焼肉屋かお好み焼き屋を提案され、「俺、お好み焼きはそんなに好きじゃないから焼肉行こう」ってことで、3人で焼肉を食べた。二人は、1、2杯酒を飲み、飲めない僕は「焼肉には米だ」と思い、ジュージュー焼ける肉とともに米を頬張っていた。

そのときの話の内容を見事に覚えていない。貴子が夢中になって何かを喋っていたのだが…ウィスパーボイスすぎる彼女の声は、肉が焼ける煙とともに紛れ混んでいたのだった（確か、不思議な彼氏について夢中になって話していたのだと思う）。焼肉もお好み焼きも貴子には合っていないな…と思った。でも、何もわからなかったわけではなかった。ちょーニヤニヤして酒に酔っているというより、自分の恋話に酔っていたように見えた貴子の印象は、忘れられないくらいだ。

焼肉屋を出た。涼し気でちょっと寂し気な夜道だった。「2人って普段なにしてんの？」と唐突に聞いた。「同じ臭いがするけど…それは、夜の人って感じかな…」と加えた。「ま〜それは当たってるかも〜」と和子。ほんのちょっとの間だったと思うが、少し灰色の空気が通り過ぎていくかのような感覚があった。「そうだけど〜えへへへ〜

ちょっと違うかも。お昼でもしてるもん。うふふ」と貴子。「あー風俗か？」と言ったら、「そうそう。そうなの〜SMしてる〜」「へー。…は!？」と納得しつつ予想もしていなかった「SM」という言葉を飲み込むことができなかった。

「SM」？そこは一体何をするのか？そして、何をされるのか？が同時にきた感覚だった（SとMと二つの役を言っているからね…）。さらに、「SM」＝「性風俗」と思考回路がつながるまでに時間がかかった。性風俗でお遊びをしない僕にとって、「SM」というカテゴリーがそもそもなかったのだろう。

戸惑いに反して「そこって、人募集してない？」と言ってしまっていた。だが、「え？聞いとく」とかなんとか言われたまま、話は止まった。

タイミングは、1人で動いていない。相手の状況にもよりけりだ。

(5) 空白の1年

この間、僕の周囲の人も貴子の仕事を知るようになった。それは、ある人がSNSを使って、俺の友だちは〜って具合に貴子が働いている店のリンクも貼ってつぶやいたそう。そこから、瞬く間に貴子の話が伝わってきたのだった。

僕は毎回、初めて聞いたかのような顔をしていた。噂話も武勇伝語りも世の中にはあるけれど、それは楽しい話題提供か？と思っていた。偏見だってある仕事だから、多くの人が公開しない職種。だからこそ成り立つところでもある。また、なかなか身近にいない仕事をしている人だから、特別。

だから、持ち上がりやすい話かもしれない。だけど、貴子が「SM」をしていることを知っているとか知っていないとかの話が、つまらなかった。

「すごいサービスをしている」とか「風俗とかってさ…」とか肯定・否定の話で止まることが多かったからかもしれない。また、「風俗嬢」という言葉を盾にして、それぞれのお遊びや恋愛事情を聞くことが多く、本題はそっちか…貴子が、ぜんっぜん特別にされてないじゃん！と思っていたのだった（僕は、ここでの会話は、それ自体が本題だし自然だと思うので、それはそれで楽しめますが…）。

「SM」って特殊だと思うし、そうじゃなくなったら意味なくなるんじゃないかと勝手に解釈をしているから、噂話でどんどん広がってたら、なんだか貴重じゃなくなる気がしたのかもしれない。僕もよく知らないくせに高飛車だったかも？と思うし、広める野郎と大して変りなかったと思う。

この時期、僕の状況は、なんか仕事ないかな。どうせふらふらしてるんだし、今までしたことのない業種に行ってもいいかも。誰かとともに何かしている感覚ある仕事が楽しいんだけどなんかね〜。食っていきゃなんないから、そんなこと言っている場合じゃない！仕事見つけよう！でもな、同胞と知っている相手でも、結構違う人扱いになるしな。それなら最初から違う人として入れるといいな〜どうせ一人になんてなれっこないんだから、まずは一人でやっていきたいな。こんなモヤモヤを抱えている時期だった。

余談

水商売や風俗がある界隈を歩く男集団が自分と女の子のかかわりについて盛り上がっている会話場面に遭遇します。「あの子ちょー可愛かった」とか「俺のこと好きなんじゃないか!？」とか「テクニックが、(は) んばなかった」とか。細かく書くのは避けますが、女の子に対するネガティブ発言も含めて、なかなか自信ある口調でおしゃべりしている場面をみかけます。女集団だったら(もしくは、女がいると)ランチ行こうってだけで、上記と会話内容は別だとしても付き合っている相手とかの話って自然とあがるようですが、男もこういう話をしだしたら止まらないなんてこともあるのかも?ただ、きっかけ次第なのでしょう。

(6)「面接日」ゲット

和子と貴子と飯に行き、1年後くらいのことだったろう。もやついている最中、僕が咄嗟にとった行動があった。

ステップ1: 貴子を思い出してしまった!
ステップ2: うん?これも何かの縁!?
ステップ3: 貴子に連絡してみよーっと
ステップ4: 「貴子の職場、男募集してない?バイト希望なんだけど」
以上。

ここから、少しだけ彼女を知っていくようになった。返事をくれた際、「聞いておきまーす」だけでなく、入れる曜日や時間帯の確認をしてくれた。それも適切で簡潔な問い。かつ、それが丁寧な印象だった。不気味な雰囲気を持ち主だけど、礼儀正しくどこか自分と相手との距離をうまくとっている感じがし、好印象だった。先に聞いておけば、店の人に伝えやすいというのもあ

るだろうが、業務的な印象ではなかった。

1週間後くらいだった。貴子から連絡がきた。「店的にも是非」とどうやら人手不足だったようで、僕の電話番号を店長に教えてもらうことになった。ただ、この時期暇をしていたとはいえ、僕が出られないこともたまたあり、僕から電話するよう貴子に伝えた。すると、「店長」=「熟女というかマダム」とお知らせがあった。てっきり、男が出ると思っていた。

貴子は、段取りがいいが業務的でなく、おしとやかにさらりときっとこの先知っておいたほうが相手にとっていいだろうと思うことを告げることができるいい女。咄嗟に出る僕とは大違い。

(7) 認識違い

反対者が現れた。当時付き合っていた彼女だった。「おれ、SMクラブの受付をするかも」。面接に行くことを言っただろうか。言ったけど、反応が悪く、行く的発言に止めておいたような…。

貴子に「彼女が反対しているけど、なんとかして行くわ」「大丈夫ですよ・・・ファイト!」みたいなやり取りをした気がする。真剣に働いていたし、ひとまず彼女に打ち明け、了解してもらった。



(8) 面接日決定

店長に電話をかけた。サクサク面接日時が決まり、店まで行くことになった。とはいえ、HP をみても場所は明確に示されておらず、とある場所に来るよう伝えられた。そこから電話をすれば、口頭で道案内をしてくれるということだった。

不安と混乱でしかなかった。「店」と言っているのだから、店舗はHPを見ればすぐわかるだろうと思った。しかし、「無店舗型」のため「店」はないはず。でも、HPに「ご来店」の場合の指示があったため「店」はあるってことか！？それなら、どこで何をしているのか、さっぱりわからなかった。また、そもそも「店長」＝「熟女」と言われていたにもかかわらず、「本当に熟女！？」と言ってしまうくらいに、「おばさん」の声ではなかったことにびっくりしていた。

貴子に面接日が決まったことを伝え、「本当に熟女！？」と加えた。と同時に貴子が、「マダム」と言葉を足していたことに納得していた。声のトーンと話すペースから、気品を感じた（「熟女」に気品がないってわけではないと思うが）。しかし、僕のもどかしさは残ったままだった。「店長」が女性であるということに納得したに過ぎなかった。また、貴子から「変な職場」だけど頑張ってみたいな返事が来、どんな場所で面接が行われるのか全く想像できなかったのだろう。決まるといいなと思えば緊張し、「マダム」ってどんな人なんだ！と思えば、あー楽しみじゃないか！！と思った記憶が今でも鮮明に残っている。

今思えば、あの緊張はいらなかったと思

う。一般的には、面接をして、採用するか検討され、合否が出される。しかし、思い返せば、貴子から来た「お店的にも是非」という返事の時点で、ほぼほぼ雇われることは決まっていたようだ。

そこも職場の面白さを出していたと思う。貴子とちょこちょこ会っていたにしても、互いを知る機会は、ウィスパーパーボイス焼肉音にかき消されてたデーの時くらいじゃなかっただろうか。女の子だけが居る場所、厳しそうな社会なイメージと思っていた僕は、マダムはよく採用決定をしていたなーと思う。貴子がそれだけ信頼されているキャストだったのだろう、と当時を振り返る。

余談

「熟女」＝「おばさん」ではないことは周知のことだと思えます。「おばさん」と言われ「熟女」という解釈はしませんし。

でも、「熟女」ってなんっすか！？という疑問が、僕の脳裏に何年もつきまっています。30代以上の女性を表していることもあれば、40代、50代の場合もあるんです。基準は、年齢じゃなかったのか！！と思うことも多々あります。

性風俗というカテゴリーで話しを進めているので、「性風俗」の場から話しますと、「熟女」がいる店でもいろいろな風貌の人がいます。店側のイメージによりけりですし、キャストもそのイメージに引き寄せられて面接までたどり着きます。あるところでは、若ッ！と思う雰囲気の人もお見かけしますし、また別のところでは、結構年齢いつてるよね？と思う人もお見かけします。熟女店のタグに「人妻」とあり、20代くらいの方が在籍していることもあるます。客側も自分の「熟女」イメージにあった人を選びます。「熟女」認識は多様です。

「熟女」とつけばそんな性的な表現！とか、性的行為無理〜という方は、ラベルに惑わされずに確かめていただくのもアリだと思います。

ちなみに、僕の「熟女」認識年齢は、年々上がっています。30を超えた今、僕はオッサンであると自覚する今日この頃で、気軽さが一歩間違えばセクハラおじさんになる層に突入です。オッサン自覚中の僕にとって、30代女性は、熟女に入りません。認識する人の年齢にも関係している、「熟女」認識。

社会の状況によって「熟女」風俗店の人気に変動があるとか、ないとかです。

綴り人/しすてむ・きよだけ

[清武システムズ](#)という看板を引っさげ、活動中。しすてむ・きよだけは、アイデアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。

清武システムズ限定コース解禁!!□

ートーク about 熟女コースー

「私、熟女です」、「いいえ！私は熟女じゃないってば！」、「熟女ワードで私を見ないで！」、「俺がイメージする熟女は・・・！」などいろいろ思うことがある貴女/貴方♥□□□是非、しすてむ・きよだけとお喋りしませんか？

「いいよ♥□」□とおっしゃってくださる方は、下記連絡先に、ご希望の日時、セッション場所をご連絡ください。いくつかの希望候補をあげていただくとありがたいです。是非とも、「熟女」で悩んでいる僕を、リードしてください♥□

1対1でも複数でも可能！複数ご希望の場合は、お友だちをお連れください。なお、プレイ開始後の乱入も可能でございます。

あなたとあなたのお連れ様のお好みのタイミングをお選びいただけます！

まずは、お気軽にお問い合わせくださいませ♪

【料金】 無料

（セッション場所や交通費、飲食代は、甘えてもいいですか？）

【指名料】 無料

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net